SDGs 実現のための自立した実践者（省察的実践家）を育てる居場所づくりの構想

－　子ども達がリトリートする森の隠れ家・秘密基地を通して考える　－

若森達哉
（奈良教育大学附属中学校）
橋崎頼子
（奈良教育大学学校教育講座（教育課程・教育方法））
竹村景生
（天理大学総合教育研究センター）
孫美幸
（文教大学国際学部国際理解学科）
山本浩大・中嶋たや・福田真人
（奈良教育大学附属中学校）

A Plan to Nurture SDGs Practitioners through the Creation of Places Where One Belongs:
Thinking Based on the Situation in the Child's Secret Base

Tatsuya WAKAMORI
(Junior High School attached to Nara University of Education)
Yoriko HASHIZAKI
(Department of Teacher Training and School Education,Nara University of Education)
Kageki TAKEMURA
(Education Center,Tenri University)
Mihaeng SOHN
(Faculty of International Studies,Bunkyo University)
Kohdai YAMAMOTO, Taya NAKAJIMA, Msasato FUKUDA
(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：子どもを育むべく存在している学校環境や社会的環境がかえって子どもを追い詰めるということがある。持続可能な社会の実現において、俯瞰し行動することは肝要であるが、関わる人そのものが疲弊しては続かない。そこで課外活動を中心とした取組の中でリトリートすることの価値を見つけ出し、教育の文脈の中に定義していきたいと思う。また学校での自然に関わる学習を通して、ESD において必要な自然観についても考えていく。

キーワード：持続可能な開発のための教育　Education for Sustainable Development
自然観　values for nature
リトリート　retreat
生徒指導　students guidance
居場所　places where one belongs

1．はじめに

ESD の価値観は、本校の教育課程を支えるバックグラウンドになっている。それと共に、教育課程の中で収まり切らない ESD の価値実現を生徒たちが日常的に体験できる場が求められていた。とりわけ本校の部活動である裏山クラブはこの 20 年間、大学・地域・企業と連携を図るなど、ESD の価値実現に向けて取り組んできた。

その一つに、奈良県景観保全課の依頼を受けた本校を取り巻く平城山丘陵地の放置竹林の環境整備活動がある。具体的な活動内容は、竹林の間伐による整備活動と、伐りだされた竹の利活用の研究である。本校は地域の緊急避難所としても指定されているため、緊急避難時にこ

の竹や竹林の特性を活かした道具づくりができること、またそれを被災者や避難所に提供できることを目標としてきた。

本年度の研究は、これまで意識を外側（体験的な利活用）に向けていた活動を反転させ、内省的なESDの学びの場を里山活動の中に創出することを目標としている。

新学習指導要領では「資質・能力」で「何ができるようになるのか」が問われるようになった。裏山クラブにおいては、それは地域の課題に対応する身近な取組へ自ら進んで参画できることである。しかし、私たちの活動がESDを踏まえたものであるためには、単に何かをなすだけではなく、その行為の主体となる「わたし」の存在への確信が持てて、自他に尊重される関係性が構築なければならないだろう。そこで前提として「私（達裏山クラブ）は、（環境や社会と向き合い）何のために存在するのか？」をリトリート（静思）する場所や機会を提供する必要があると考える。

株式会社「森へ」(森へ 2022) が行っている活動「森のリトリート」では「あわただしい日常から自分を切り離し、森で過ごすことで、心身の深いリラックスや人生やビジネスについての、より本質的な気付きを得る」ことをリトリートの目的としている（山田 2018）が、そこから着想を得て、本実践ではリトリートを「日常的に感じる時間的拘束や社会的拘束から距離をおき、心身ともに落ち着いた状態で自己を見つめ社会への関わりを捉えなおす」活動として定義したい（本実践内では「リトリート」を場所的な意味を持った名詞的語句､「リトリートする」を上記のような行動として動詞的語句として記述を行う）。それが、将来的にSDGs実現のための自立した実践者（省察的実践家）を育てていくことにつながると考えている。

裏山クラブが想定または提供する、子ども達がリトリートする場所は、森の中の自ら作り上げた「隠れ家」であり､「秘密基地」であり、時にキャンプファイアーや焚火をなかまたちとみつめることである。

子ども達は、日々こなしていかなければならない課題に急きこまれ、時間に追われていく日常の中にいる。だからこそ森の循環する時間の中に浸り、子ども達が本来の自分を取り戻せる場所が求められる。とりわけ、裏山クラブに集まる子どもたちの発達課題を考えるとき、リトリートする場の創出は喫緊の課題と考える。

またこの実践を通して育成を目指すのは、持続可能な社会づくりのための課題解決に必要な「7つの能力・態度」(文部科学省 2022)(注 1) のうち、3. 多面的・総合的に考える力　5. 他者と協力する力　6. つながりを尊重する態度である。

また、本研究とSDGsとの関わりとして11.住み続けられるまちづくり、15.陸の豊かさも守ろうとの深い関わりをあげる。本研究で関わる管理者不在による地域の竹林の問題や、本校の裏山の維持管理は、各地域にみられる里山の問題や、林業の継続の課題にもつながると考える。森林保護をうたうだけでなく､その活用と維持､調和､循環がそこに求められている。これらを学習者らが感じ取り、主体的に森林、地域社会に関わることでSDGsの目標達成につながると考えている。

2．生徒を取り巻く現状

前提として本校の学習者の不登校等の臨床的課題は増加傾向にある。令和 2 年度には全国的に長期欠席者（不登校者等）数が減少傾向にみられたものの、令和 3 年度にはそれ以前と同じような高い数値に戻っている (文部科学省 2022)。ここではコロナ禍における様々な接触機会や行事の減少による影響もふまえた値が出ていると述べられている (注 2)。本校では令和 4 年度において学年差はあるものの長期欠席者数は多い数値がでている。不登校の要因は必ずしも学習者を取り巻く不安が原因ではないと考えるものの、不安要素やストレスが多い者が不登校になっている状況がある。人間関係のもつれや構築の難しさ、学校システムや教師とのなじまなさからくる居場所の問題がそこにあると考えている。オンライン授業を行った際、カメラを通して自らの顔を他者に映し出すことに大きな抵抗および不安を覚える学習者も少なくない。理由を聞くとほとんどが漠然とした不安と恐怖であった。これらの問題は中学校教育のみならず大学でも同様であると聞く。具体的データは本実践ではとれていないが、大学生の不登校というべきか、講義に参加できない状況があるという話を聞いた。言語化し難い不安や恐怖が生徒を取り巻くということが現状発生しているのである。

学校教育の時間管理、教室といった運営システムは各校や一部の学校を除いて明治期よりさして大きな変革は行われていない。特に教室の環境において、旧来の環境が変わらず存在している。例えば、机があり椅子に座らせるという文化および指導は現在では当たり前のように行われているが、これは明治期に文明化を図る上で取り組まれた内容であり西洋化を強化するためのシステムであったとする研究もある（西村 1997）。教育によって子どもらを学校運営に沿った形に行動させる上で、椅子や机は制服などと共に重要な役割を果たしてきた。これは早坂 (2008) によれば無数の選択可能性を持った「子ども」を学校文脈に沿うようにその行動選択を絞る「生徒化」してきたといえる。しかも現在の教育において椅子や机はどのような働きを持っているかを考えもせずにである。フィンランドでは椅子の代わりクッション、ソファー､バランスボールが置かれていることもある｡オーストラリアでも教室での授業で机を使わず授業するスタイルが一般的に存在する。善し悪しはあるかもしれないが、環境においてどの学校をみても大差ない日本の授業スタイルは、環境そのものが子どもを制度化または生徒

化していると捉えることができると考えている。椅子は学習に意識を向かせるために重要な働きを持っていると考えられている。しかし一方でそれは強要であり、簡単に椅子から離れることは管理の点から当然のように許可されていない。他者が定めた時間に拘束されるための拘束具の働きをも持っているのではないだろうか。個人にあわせたものではなく個人を集団に合わせる働きを持ったものである。

このように椅子一つにせよ子どもを取り巻く環境は、個人を社会に合わせる機能を持っている。その中で生きづらさを認識する生徒が出てくるのは必然的な事象であると筆者は考えている。小学校中学校において個人を滅し社会に合わせる中での不適応が出始めるのは当然のことである。

本校の裏山クラブに在籍するものにもこのような違和感を覚えているものは少なくない。学級では得られぬ所属感を求めて部活動に参加する者もいる。本校生徒の特徴として学力への意識が高いことが上げられるが、それは生徒自身（または保護者）が学力で個人の優劣（評価）を図る認識が強いと言い換えることもできよう。裏山クラブでは学力が個人の価値を決める物差しとして機能していない。そのため学力といった外部評価から離れ、自分らしくいられる居場所としての意味が生まれていると考えられる。

これらのことから、教室や授業、学校システムそのものが生徒を追い詰めてしまう中、生徒にとって、または学校、社会において、自己理解を深めたり社会を俯瞰してみたりするための「リトリート」が重要な役割を示すと考えたい。

３．活動

昨年度、私たち裏山クラブは竹林整備を通して、廃棄される竹の活用方法について考えてきた。本年度はそれを活用したリトリートのためのツリーハウスの制作、米作りと文化継承について考える実践、ESD 道徳の実践を行った。

３．１．ツリーハウス作り

裏山クラブではこれまでもツリーハウス作りに取り組んできた。前任の顧問が始めた取組で、裏山の中に数か所制作してきた。その時からの講師の力を借りて「リトリート」の場としてのツリーハウス作り（図１）を行った。使用した木材は桜井市の林業家の間伐材等を用いた。また屋根材には前述の放置竹林の間伐材を用いて作成した。竹材はインドネシア等東南アジアの建築ではよく用いられており、かなり大きな建築物も作られている。原料も入手しやすく、加工に関しても一定の技術、および道具があればさして難しいわけではない。竹を半分に割り交互に組み上げることで雨が中に入らないようにして

図１　ツリーハウス

いる。環境にもよるが、この手のツリーハウスは掃除を丁寧に行うことで 10 年弱は存続可能と講師から聞いた。このことから、SDGs 的観点から見たこれからの社会のありかたと森林資源という関わりに良いヒントとなると考えられる。竹林の間伐と同時に材料の選定、および加工を進め 20 人程の人数で活動し、3 日間約 20 時間程かけて作成した。裏山クラブでは自主性を重んじ、生徒は自らのペースで休憩をとり、また協力しつつ作業を進めている。他者とコミュニケーションをとることが苦手なものは一人でもできる作業を進める姿がみとめられた。

社会（学校）システムからのリトリートを目的として、自然を意識できるように室内には電気を通さず、かわりに窓をつけ光が入り込むように制作した。制作後 4 か月程度立ち、雨天時に確認を行っているが竹屋根からの雨漏りはない。作成後は生徒たちのジップラインのスタート地点となったり中でくつろぐ場所となっている。学校の中にありつつ、生徒たちにとって学校のシステムを意識しない場所として活用されている。

またここでの協力して作業を行ったノウハウや連携性は附属幼稚園でのウッドデッキ作成にも生かされた。木工加工のための道具の使い方を学びつつ、作業を分担しながら園児の保護者とともにウッドデッキを一日で作り上げることができた。

３．２．米作りと文化継承

自給自足を今の社会の中で行うことは難しいということは学習者も理解しているところではあるが、社会での持続可能性を考える際、自分で食物を育てること、またその体験は肝要であると考える。そこで本年度では本校の中庭に畑を作り野菜を育て、トロ船を用いた米作り（図２）を行った。

図２　中庭での田植えの活動

また一部の生徒たちには、米作りの副産物として出る藁の活かし方について本校の総合行事「奈良めぐり」における学習を積ませた。日本では藁を用いて様々な日常の道具を自らの手で作成していたが、それらが今現在で

は制作方法を含め失われようとしている文化であることを学んだ。京都の花脊において、そのような状況に対して危機感を覚えつつアート作品として藁を活かしているアーティストがいると聞き、講演を依頼した（注3)。そこで藁文化の実態と可能性について学習者らは学ぶことができた。その時に学んだしめ縄づくりの方法をもとに、自分たちが育てた稲藁でしめ縄を編んでいる。残念なことに日照条件や土の問題等で米自体は実が入っていないものも多く食用には至らなかったが、藁自体はしめ縄として利用することができた（図３）。

図３　生徒が作ったしめ縄

３．３．ムクロジとの関わり

本校の裏山の入り口には無患子（ムクロジ）の木が生えている。種子そのものはお守りとしても扱われている。裏山クラブではこの種子を用いてキーホルダー作りを行っている。この無患子を用いて１学年の道徳の授業では自然への感性の育み、自然観の醸成を目的として実践を行った。導入として３．２で述べた京都の花脊の藁細工を用いて、持続可能な自然との関りについて触れ、身近な自然利用を体感する材として無患子を題材とした。

花脊の藁細工は、身近なものやありふれたもの、伝統的なモノがアイデアによって新たな価値を創造する仕組みを示し、持続可能な社会を考える切り口となり、導入の意味を成した。

また主題材として用いた無患子は古来より石鹸として用いられてきた植物である。アレルギー物質を持たず、現在の日本ではあまり活用さてていないもののアジア圏では洗濯洗剤として用いられている。持続可能な社会実現の可能性を考える題材、および資源としての可能性を有するものであると考えている。また洗濯という衛生面と水質汚染の問題に踏み込む題材ともなりうると考え、ＥＳＤの理念を含んだ道徳の授業での題材とした。

４．結果と考察

実践後のインタビューやワークシートの記述から実践者は、生徒と実践者に内包される三つの自然観に分けて考えた。

①自然と私（人間）の対立
②自然の中の私（人間）
③私（人間）= 自然

①は自然へのコントロール、利用に重きを置いた価値観であると考える。持続不可能な環境破壊はこのような価値観の下、行われてきたのではないかと推測する。実践３．３における生徒の感想等を読み解いても「自然のものがもっと使えるということを知らないといけない。」「私たちは快適な日常を手放すことができないので、ムクロジを使うことは難しい」といった生徒の感想に見られるように①的価値観が最も多く見受けられた。自然をどのように扱っていくべきかという観点が多く自然と人、自分を分断させて考えているケースが見受けられた。

②は自然を全ての土台として捉える価値観である。人間はその中に他生物と同様、並立して生かされている。学校などで刷り込んで教わる自然観は多い。つまるところ、②の価値観を刷り込まれつつ、本質的には自然に対して①の価値観を持っているという価値観の乖離現象が発生しているのではないだろうかと考える。学習者の振り返りにおいて少数ではあったが一部の生徒には見受けられた価値観である。実践３．１の感想に「ツリーハウスの良いところは中心にある木が今も生きているということです。成長する家って感じがする。ツリーハウスによっては木に合わせて修理をしないといけないけど、それがきっとおもしろいところだと思います。」とあった。この感想からは、ツリーハウス制作が、人工物（例えばそれはツリーハウスに限らず社会と捉えても良い）が自然との関わりの中で、自然を基盤として形を変えていく構造に気が付くことができるといったことを学ぶ題材となる可能性を感じた。また実践３．２での感想として「米作りがうまくいかなかって残念だったけれど、きっと昔の人も最初苦労したんだと思います。太陽光とか、虫とか自分でコントロールできない問題がいっぱいあったので仕方ないと思いますけど。次はもっとうまくやってみたいし、どうやったらうまくできるか調べたいと思います。」とあったが、これは一見自然を利用する視点からの考えに読めるが本質的には自然のコントロールの難しさとそれに向き合ってきた人類の叡智の話として捉えることもできる。「自然は操るものではない。しかしどうやって向き合っていくか」という考え方が学べたことは本実践の望むところであった。

③は全て事物は自然そのものであるというような価値観である。華厳宗の「一即多、多即一」、およびギリシャ哲学のヘラクレイトスが述べた「One is ALL ,All is One（一は全、全は一）」に本質として同じである。ESD の学びを考えた時、学ぶ者の自然観として持つべきは②または③であると考える。本校の総合学習で取り組んできた水俣の問題は、自然とのつながりを切り離したころに一つの要因がある。その考えは自然観①のもと、自然と人が、人と人とが分断されているところに問題が複雑化した。自然と人、生命との持続性を考える上では②または③の自然観を真に持たねば自分事化を図れず、行動化にまでつながることはないと考える。このことからも自己を振り返り自らの価値観（自然観）を省察することは喫緊の課題であると考えた。また、②と③の差異

については②にはまだ他者との分断の枠組が残っていると考えている。②の価値観に基づいたとき、そこではまだ人とその他を分けた思考を持ち、行動化していく際、自然主体性ではなく、人間主体性を覗かせているように見える。この差異や具体的価値観に関しては今後の研究の中で明文化していきたい。

次にリトリートの観点から述べたい。最初に生徒を取り巻く必ずしも良いとは言えない社会的負荷について述べたが、それらの多くは空間を変えることである程度逃げることができる。物理的に負荷を感じる場所から、全く関係のないところへ行くなどして、リトリート先ではできるだけ負荷の原因と関わりのないことが重要だと考えている。生徒ならば学力や他者と比較される空間から離れることが肝要だと考えた。そこで本実践ではツリーハウスそのものを避難所的意味の強いリトリート先として作成した。その際の記録には作成の喜びや、作成時に新たに生まれた人間関係について言及していたものが多くあった。結果的にその喜びや人間関係は持続し、学校への期待感という点で日常に良い影響を与えていると捉えているが、これはリトリートによる価値観の再構成によるものであると考えている。米作り実践にせよ、しめ縄づくりにせよ、学校で評価の基準とされる学力（例えば成績や発表スキル、業績）といった観点からリトリートして共同で取り組む楽しみ方や、自然との関わりを通して新たな自己への価値基準が生まれてきたと言えよう。

自己や物事を省察的に見つめなおすとは日常の中で知らぬ間に身に付けてしまった（または刷り込まれた）価値基準を見直し（捨て）、上記の新たな自然観や他の価値基準を体験的に得ることではないかと考える。特に本実践では体験活動に重きをおいたが、知識的に学ぶより体験という形を通して身体性を持たせたという点が肝要だと考えている。一方でこの構造は煩雑な日常との差異によって成り立つという側面も持っている。日常から離れる時間と場所を学校において提供することは困難な場合が多い。そこで空間的な面ばかりでなく精神的なリトリート（例えば学習者の自己評価や他者評価の基準を増やしたり、変容させたりする場面）をどのように設定するかということが学校における現実的な課題であると考える。体験活動を通しての生徒の変容等の具体的研究は今後の課題としたい。

また本実践では自然観①を否定的な捉え方をしているもののその考えとの良い付き合い方についても考えるべき必要がある。価値観には本校が持つ環境や、日本が持つ環境などの影響もあろう。この点に関しては課題となる。

注

1) ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度 1. 批判的に考える力 2. 未来像を予測して計画を立てる力 3. 多面的・総合的に考える力 4. コミュニケーションを行う力 5. 他者と協力する力 6. つながりを尊重する態度 7. 進んで参加する態度。

2) 「令和 2 年度は新型コロナウイルス感染症の影響により，生活環境が変化し児童生徒の間の物理的な距離が広がったこと，日常の授業におけるグループ活動や，学校行事，部活動など様々な活動が制限され，子供たちが直接対面してやり取りをする機会やきっかけが減少したこと，年度当初に地域一斉休業があり夏季休業の短縮等が行われたものの例年より年間授業日数が少ない学校もあったこと，新型コロナウイルス感染症拡大の影響による偏見や差別が起きないよう学校において正しい知識や理解を促したこと，これまで以上に児童生徒に目を配り指導・支援したこと等により，いじめの認知件数が減少したと考えられる。」

3) Momoko Fujii、WARA ジュエリー作家 / 藁細工作家 Ricestraw artist、京都花脊で活動。「花脊 WARA」、http://hanasewara.com/。

参考文献

(1) 山田博（2018）, 森のように生きる ― 森に身をゆだね、感じる力を取り戻す , ナチュラルスピリット .

(2) 森へ , 森のリトリート公式ホームページ ,morie.co.jp,2022.11.01.

(3) 文部科学省 , 持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）, https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm, 2022.11.1.

(4) 文部科学省 , 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 , https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm,2022.11.1.

(5) 西村大志（1997）,「日本の近代と児童の身体　座る姿勢をめぐって」，ソシオロジ，42 巻 2 号 , 社会学研究会 ,p. 43-64,160.

(6) 早坂淳（2008）,「子どもを「生徒化」する教育メディアとしての机と椅子 :constructionism と constructivism の差異を手掛かりに」, 日本教育社会学会大会発表要旨集録 ,60, 日本教育社会学会 ,248-249